東西洋の子守唄（下）

文學博士　松村武雄

親の心は――殊に母親の心はいつも子供に繋がつてゐる。母親の胸は、子供の歡喜と悲哀、幸福と不運、健康と疾病、その他あらゆる善きものと惡しきものとの、子供の心身の上への顯現に對して、觸れるとすぐにはじける鳳仙花の實のやうに、若くは觸れるとすぐに葉をとぢる眠草のやうに、鋭敏に微妙に感じ動いてゐる。母の感情は一種の Pendulum である。吊された振子である。それは『子供』を中心として、絶えず喜びから悲しみへ、安心から不安へと搖れつづけてゐる。だから子守唄には、あらゆる災厄、あらゆる不幸、あらゆる疾病から、おのれの子供を保護し解放しようとする母の希求が、濃厚に鮮明に滲み出てゐる。

西洋では、子供の保護者、幸福歡喜の授與者として、さまざまの聖徒が現れる。それからサンタ・クロスお爺さんがゐる。いなこの髯の長い福々しいお爺さんも、實は聖徒の一人であつた。サンタ・クロスといふ名は、セーント・ニコラスの和蘭訛であらうと言はれるからである。セーント・ニコラスでは、子供の伴侶として保護者として、全く餘りに硬すぎる。嚴めし過ぎる。いな名前ばかりではない。その性情行動も、基督教の聖徒それ自身では、餘りに嚴肅に過ぎる。子供の心と生活とに對して、高すぎる。サンタ・クロスお爺といふ一個の好々爺に變形させられて始めて子供とぴつたりと融合するやうになつた。自分はこの Metamorphosis の過程と產果とを太だ興味があると思つてゐる。それから歐洲ではまた神や基督や聖母マリアが、子供の保護者恩惠者としてよく子守唄に拉し來られる。西班牙の Gubernatis 伯爵がその著 Usi Natalizj

のうちに收めた同國の一個の子守唄に

マリアさまの赤ン坊（基督のこと）
まだまだ搖籃お持ちでない。
お父さまは大工だに、
今に搖籃が出來るだろ。

セーント・アンナのお伯母さまが
セーント・ヨキムのお伯父さまが
二人で搖籃ゆりなさろ、
クリスト樣が眠るように。

そこでわたしの赤ン坊も
私の大事の赤ン坊も、
眠つておくれよ、マリアさまと、
神のお子さんがついてゐるぢやに。

とある如き、若くは獨逸のハイデルベルヒの子守唄の一つに、

ねんね、赤ン坊、ねんねしな
お前のお父さんは羊飼

お前のお母さんは、外へ出て
楽しいお夢が降つて來る
木の枝摑んで搖つてゐる。
ねんね、赤ン坊寢んねしな。

ねんね、赤ン坊、寢んねしな。
空は羊で一ぱいだ。
星はみ空の小羊で、
羊飼のお月さんが世話してゐる。
ねんね、赤ン坊、寢んねしな。

ねんね、赤ン坊、寢んねしな。
クリストさまも羊持ち、
いえ、いえ、自分が神の小羊だ。
そしてこの世を救ふため、
死んで行かれた、クリストさまが。
ねんね、赤ン坊、寢んねしな。

である如き、その好適例である。

基督教國がかうした宗教的人物を、子守唄に拉し來つて、子供の保護を托するやうに、異教の信奉者は、古典的な超自然的靈格に同一の役をお願ひする。最も美しく最も優れた異教――ゼウスやアポロンやアテナを持つ宗教を生んだ希臘人の子孫は、今日では大部分は基督教化されてゐるのにも拘らず、素朴な田舎人の間には依然として古典的な三人の『運命の女神』――一人は人間の命の絲を紡ぎ出し、一人は命の絲を引きのばし、一人は鋏で命の絲を斷つといふ三人の運命の女神が生きつづけて、子守唄の中に、子供保護の役をふられてゐる。

日本の子守唄にも、さまざまの保護者や恩惠者が見出される。最もポプユラーなのは、地藏尊であらう。それから七福神のあるものも、この光榮を荷ふことがある。わけて興味の深いのは、鬼子母神である。人の子を捕へ食つて、親々に痛ましい悲嘆と恐怖とを與へてゐた此のAzEEな一女神が、阿彌陀如來におのれの子を隱されて、憂悶のあまりに、翻然開悟して、人の子の熱心な擁護者に變じたといふ傳承は、佛典の扱歪した形式ではあるが、子守としての鬼子母神になつかしいロマンチソクな味と色調とを與へてゐる。

かうしたさまざまの性格を拉し來つて、積極的に子供の幸福を增進することを希求した親々は、またさまにまの手段によつて、消極的にあらゆる災厄からおのれ達の子供を免れさせようと希求する。その希求もまた端的に子守唄に反映してゐる。

厄災の最も大きなものとされたのは、低い文化階層の常則として、魔術や呪巫であつた。それ故これ等のものが放射する幻怪にして恐ろしい力から子供を自由にするといふことが、親々の最大の關心事であつた。そしてこれ等の魔力を驅除すべきさまざまのものが考へられ求められた。カラブリアの民衆は蛇の脫殼が魔法を拂ふ効能を有するとして、夜毎子供の枕の下に敷くことを忘れなかつた。スコットランドや伊太利の人々は、火に大きな淸淨力を認めて、子供の傍に之を燃

やしつづけることを怠らなかつた。羅馬希臘、印度、稀には日本及びその他の國々では、唾液に妖魔を撥無する力を認めて、ことごとに子供の傍に唾を吐いた。ペルシウスが羅馬の親々の子供に對する迷信的な心づかひを描いて、

『祖母若くは迷信深い叔母は赤兒を搖籃から取り出して、その額や唇に、清淨力を持つ唾を塗つて、災厄を防いだ。それは惡魔の邪視を斥ける効能を持つてゐることを知つてゐるからだ。』

かくてこれ等のものがまた屢々子守唄のうちに隱見するのは、頗る自然な心理的歸趨と云はなくてはならぬ。

親々の大きな望は、その兒女の成長にかかつてゐる。彼等の老の至るを忘じ了して、子供の生立を樂しむ。健かに生ひ立つだけでは滿足が出來ない。女兒ならば、花の如く美しく、男兒ならば太陽の如く輝やかに、獅子の如く强く生ひ立たんことを欲求する親の目から見れば、子供は全能である。恐るべき潛在的勢力(ポテンシャリティ)である。どんなものにでもなり得る伏能力を持つ靈能的存在である。かくて親々は子守唄を通じて、おのれの子供の未來に、あらゆる善きもの、あらゆる高きもの美しきものを求めようとする。子守唄はある意味に於て、『親馬鹿』の美しく優しい展開境である。ルーマニアの一個の子守唄に云ふ。

ねんね、小さい赤ン坊よ、
そならはお母さんの秘藏ッ子。
お母さんはそなたを護りましよ、
お母さんはそなたを搖りましよ。
『樂し嬉し』の花のやうに、
白衣(びやくえ)のつけた天使のやうに。

お母さんとねんねよ、お母さんと。
どんな呪もかき退ける
呪文をお母さんは知つてゐる。
わし等の殿樣と同じやう
そなたは英雄となつておくれ、
軍に强く手も强く、
それでお國を守つておくれ。

ねんね、赤ン坊、ねんねしな、
神はそなたを祝ふだろ
體は黑く、目はつぶら
空照る星と輝けよ。
乙女の愛はそちのもの、
そなたが歩く足もとは
綺麗な花が生り出でよ。

と。これ男の子に對する親々の甘い、そして美しい幻想的願望の發現ではないか。更にモツヴィアの一個の子守唄に云ふ。

ねんね、娘よ、ねんねしな。
そなたはお母さんのあらせいとう（草花の名）

お母さんは側にゐて、搖りましよ。
日燒せぬやう焦げぬやう、
そなたの體を氣をつけて
きれいな泉水で洗ひましよ。

ねんね、かあい子、寢んねしな、
あらせいとうと生ひ立ちな、
樹液のやうに色白で、
柳のやうにすんなりと、
じゆずかけ鳩のやうにおとなしく、
み空の星のやうに可愛かれ。

と。これ女の子に對する親々の伴りのない、そして外目には可笑しと見ゆるまでな願望の活寫ではないか。

子守唄は母の心の影と聲とである。子供に對する母性愛の微妙な旋律であり形相である。だから他の種類の童謠が自然を觀じ動植物を觀じ生活を觀ずるに反して、子守唄に於ては子供——そして『わが子』が觀ぜられる時に自然や動植物等が現れても、他の種類の場合と異つて、それらは決して第一義ではない、主役ではない。あくまで子供が主役であり、核心的な Figure であつて、自然や動植物はそれを飾り、それを活かすための道具立に過ぎない。他の種類の童謠が、子供の心そのものの動きを傳へるに對して、子守唄は主として親の、母の心の動きを傳へる。

然るに子守女といふ一個の Geschäftig なものが生れるに及んで、子守唄は親の心、母の心の響から遠ざかつて、子守女の心の響の宣傳者となつた。親の心、母の心が子守唄の中心生命であつた限りは、そこに搖ぐ心的芬香は、子供を中心として香つてゐた。子守女の心が、子守唄の主調となるに及んで、そこに動くものは、子供を離れて、子守女の對社會的若くは對傭主的情緒であるやうになつた。即ちそれ等の子守唄に於ては、

『よく眠らなければ、私がお母さんに叱られますよ』

とか

『さても子守ほど、つらいものはない、うるさいものはない。』

とかいふ感情の動きが主題となるやうになつた。吾人はこの種の子守唄を目して、眞の子守唄からの、派生的な產物であり、第二義的傍系的な產物であると考へる。從つて當面の考察からは除外することにして、これで子守唄の小やかな考察を了へる。

幸福な、幸福な二度とは返つて來ない幼年の日！　それを愛しその記憶を慈しまないといふことはどうして出來よう。それらの記憶は魂を新しく、高くして、こよなき享樂の泉として私の爲に役立つのである。

（トルストイ）